参加者一覧 …… 02
連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03
テーマ詠欄 「夜」 …… 14
一首評 「そらよみ」 …… 18
クロスワード …… 19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 …… 20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 …… 22
次回予告・編集後記 …… 23

うたそら

Utasora

2024.
September
No.22

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

第22号

碧乃そう	@hane_ao22
青野佑季	@book_aoimusyoku
麻数	@umberhemp
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
有村桔梗	@chattenoire_k
井倉りつ	@uta_litz
石川順一	@Hitler57
宇井モナミ	@kijousan
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
泳二	@Ejshimada
hs	@hswelt
歌島孟	@Sinn1990
がね	@amicus08
涸れ井戸	@kareido1111
河岸景都	@kate_kawagishi
かわはう	@suikamikan_kawa
北谷雪	@kitaya_misomiso
砧	
君村類	@kmnr_r09
香子	@kyoko_shogi
久野和声	@wasei9th
久保田毒虫	@dokumu44
くうたか湖春	@koharu_kura
くろだたけし	@tkuro2016
桜さくら	@wJ59f8NwfuJlVq3
澤田悠生	@tanka_yuuki
じぇうーと	
西鎮	@xi_zhen_ivUT
白石夜花	@yohana_no_sekai
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
鈴木智花	@SuzukiTomoka106
砂山ふうり	
せいや	@petitchante
たえなかすず	@suzususu2009
多香子	
千原こはぎ	@kohagi_tw
辻堂　瞬	
ともえ夕夏	@croissant_hey_z
中村成志	@nakam8
夏生薫	@kaorunatsuo
夏野ネコ	@natsuneko2000
袴田朱夏	@hakamada_shuka
薄荷。	@aie0himeco
笛地静恵	@Ymcx6rhzyjEZgwq
福山桃歌	@momoka_fukuyama
古井　朔	@saku_furui
真岡まな	@mao_or_mana
まさけ	@mskpompomfuwa23
御糸さち	@MEATsachi
深影コトハ	@cotoha_mikage
南の島	@_nfkmnm
衣未（みみ）	@mimi_4567
水せ	@m_iya_o
宮岡 りょう	@myao_rrr
虫武一俊	@mushitake
六浦筆の助	@Tohakumutun5057
六厩めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2022
森内詩紋	@NJq4oEvg5glcRpu
杜崎アオ	@morisaki_ao
箭田儀一	@YChukaito32142
ヨシダジャック	@jacksbeans2
れいあむ	@Re14m_bot

計63名

たくさんのご参加ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

繊細な腕

青野佑季

子のために歌う未来があったって。ギター抱いてた日々の私へ
歌ったら眠ってくれたその日からカーペンターズが子守唄
気付いたら猫より重くなっているたった二ヶ月、されど二ヶ月
理屈とか性悪説とか無視しようきみは天使だ僕らにとっての
健やかに眠った我が子の傍でパーレン内で会話する日々
まだ海を見たことがない空もないどちらへ先に手を伸ばすだろう
沐浴でうたた寝しつつ浮いているきっと中でもそうだったのね
抱きしめる強さの加減が増えるたびわたし全部が繊細な腕

drift about

井倉りつ

「やる気がない【ように見える】」が原因で船をおりなきゃいけなくなった
「この俺にそうさせたお前が悪い、怒るお前のほうがおかしい」
あの日からずっと沖で漂って、通りかかった漁船も怖くて
ふたりだけのボートはいつもさびしくて笑ってるのに泣いているのに
いっしょにいてくれてありがとどさくさに紛れて飛び込むこともできたに
たぶん離さないようにしてくれている　容量どんどん増えてく麦茶
泣いてたい苦しんでたい癒えたくない立ち直ったら終わってしまう
「もういい」と「まだ無理」のメトロームほら、言ってるあいだに夏が終わるよ

「朝顔と草とギンヤンマ」

石川順一

朝顔の周囲の草を抜いて行く朝顔の茎は折らぬ様にと
大雨で大畝の下に水溜まるトノサマガエルが草に絡まり
カナブンが肩甲骨に着陸し付かず離れず襟足にも来る
ギンヤンマ突然動き出す時に我の驚く声も出させる
ギンヤンマ交尾の後に棒に行き首押さえるオスと尾を動かす雌
ギンヤンマ警戒飛行をするオスと産卵をする雌を目で追う
蟋蟀を朝顔の迷宮に発見し地上を這うのがお前の使命
朝顔に地上を這わせ花咲かせ枯れて行く向日葵倒れる向日葵

屋上獏部22

宇祖田都子

重力下上目遣いで落ちてくるプリンの飛沫を浴びるサークル
覗き穴　鍵のかかったウェイティングサークルに逆さのつむじ風
無記名の隠し扉に声もなくいつまでも逆さの落とし物
重なった同じ世界に声もなく蜃気楼吐く冷たいところ
二次元のカラスアゲハは重なった軌道を滑る頭を垂れて
頭から針を抜き去り性欲はコンクリートへ拡がる汚水
真夜中の渇き性欲アリジゴク触れられぬ指先のオアシス
満月のすべり台から深海へ救えなかった兎の不在

夏の終わり

泳二

一番の夏の終わりを持って来て飛行機雲を見てるから来て
こんなにも近くに雨雲が来てる眼鏡を外さずに汗をふく
ソーダバーなかったんだよスイカバー半分こしよ先に食べなよ
コンビニで買ったビールで確かめる去年の夏と同じやり方
夕立のあとの空気をかき分けてまた遠回りする帰り道
夕涼みしながら食べるたこ焼きとかき氷　遠くの花火
灯籠は少し笑って流れゆく空と交わる海を目指して
土砂降りも宿題もセミも亡霊も夏のうれしい思い出の勝ち

時をかけてゆくワタシ

歌島孟

数かぎりない失敗をくり返し、ようやくめぐり会えた気がする
ふるまいは時代錯誤に着飾って、僕は異様に見えたでしょうか
あなたへと近づきたくて歴史書を諳んじてみる、不死を演じて
まだ君と過去の御触れは生きていて、兵士は門を閉ざし続ける
窓からの光のなかで虹彩は宝石みたく輝いていた
真砂なす君の千歳があじけないものであるなら、花となりたい
限りある命で時をつまみ食いしたら、いつかは飽きるでしょうか？
普通とは異なる身体とこしへに老いぬ我が身がうらめしい人

グリーンブーツ

がね

精液のあぶくよ海よ生まれては死ぬ者たちが宿す永遠
立ち昇る火はふるさとへ行くのだろう　血はそれからも山に滴る
地下鉄の一番深いところまで　暗闇が虚空へ変わるまで
エベレストのグリーンブーツの埋もれた死者と生者が交わるところ
雨粒の破片に　写る　自分が　砕けるまでに捧げる祈り
僕も白あなたも白で溢れ出す名前ただただ見渡している
宇宙卵　破れるまでの静寂がずっと世界の裏側にある
どこまでも見通している鴉の眼　ボタン一つで出来る戦争

松本城

涸れ井戸

炎天下松本城の黒壁を眩しく眺めるボヘミアン達
モヒカンのピンクの人が城下町俳句仲間を率いて闊歩
銃砲を売りにしている古城の天守閣では風が涼しい
散歩後に城の近くで句会をし大雨のため慌てて帰る
悪天で電車が停車洗馬駅で日が沈みすっと夜になる
三時間近く遅れて終電に間に合うものの終バスは無し
とぼとぼと家路をたどる一日で詠んだ句は二百三十句
五分間自由プレゼン訓練校最後の課題、題は「吟行」

遠い世界に

河岸景都

指先が遠い世界に触れている　紙をめくれば終わる革命
誰にでもなれると思い込みたくて一人称を追いかけてゆく
水面を撫でた手のひら差し出せば海は優しく見えると聞いた
顔を上げ生活にもう戻ろうか晴れの言葉を一つ増やして
新しい服を下ろした朝みたい表紙を閉じて始まるおはなし
知らないと知っているのは美しい　いたる所に辞書は置かれる
無風では何も飛ばない乱すため知らない空を選んでいたい
魂がインクに宿る瞬間を今日も見ている　世界は進む

祭りの夜

かわはう

この町の隅から隅に至るまで日がな響く祭りの太鼓
噴き出したラムネぼたぼた地面に落ちアリがわらわら集まってくる
Switch は当たりっこないと知りながら引いたくじで当たる水鉄砲
1口目の最大瞬間風速を超えることなくかき氷溶ける
弟がすくった金魚　弟が家出た今も優雅に泳ぐ
じゃがいもをトルネードにして揚げただけなのは知りつつ惹かれてしまう
妹とノリでつけた光る腕輪　仏壇の前でまだ光ってる
晩飯を出店で済まそうとしたけど微妙に高くて結局サイゼ

Paris2024

北谷雪

熱狂のうねりを鎮め巴里の灯に大河のような歌声が降る
素麺が吹き溢れたとき十四の少女は選手寿命のはなしを
泣いたって良いのになんて一二三然してどうしたのわたしの兄さん
息を呑む躍動（二秒の５２５５Ｂ）水へと還る筋肉
片翼を光らせ腕を振り上げたバレー選手のように遂げたい
無愛想な君に右手を空けておくノールックパス待つよヘイヘイ
スーパーの袋を持てば昨晩の小さなガッツポーズの高さだ
来世では Shigekix から生えたいと拗ねる手足を宥めつつ寝る

おわりに

君村類

枯れていく季節の花を抱きしめて幼い少女の自分を殺す
雨の音が響いてばかりいる部屋の暗がりに触れる影の素直さ
ぱらぱらとめくる手帳の空白を愛せるようになってしまった
この手からすり抜けたものだけがきれい　コーヒーフィルターのかすを捨てている
猛暑日の予報がともる毎日の風に囁く懺悔の匂い
ポストには残暑見舞いが投げこまれかさぶたも塞がればわからない
紫陽花は色を変える花　比較的まっとうな社会人をやれている
ばっさりと髪を切ること忘れることなにもなかった顔で生きること

タイランド

香子

機内にて懐メロチャンネルの曲を見て　自分の年齢（とし）を再確認する
マイケルとマドンナ、プリンス、粋（いき）な選　でも小室哲哉は懐メロちゃうで
ラン島の澄んだビーチでぷかぷかと浮けば悩みも少しは軽く
おじさん達ビーチロードで野外チェス　将棋だったら参加するのに
「中国の将棋は『象棋（シャンチー）』って呼ぶのよね」象の国にてふと思い出す
大切な人へ届けと残暑見舞い POST OFFICE に絵はがき持ち込む
帰宅してスーツケースを開ける瞬間（とき）　異国の空気ふわりと広がる
ソムタムを気に入った夫に作るべく探すよレシピ　旅の余韻

晩夏の悲しみたち

久保田毒虫

悲しみはペットショップの猫のよう私は今日も売れ残り
悲しみは時に優しく夕方の雨に濡れてる私の心
悲しみが話しかけても知らんぷり夏と私が二人きり
悲しみは夜の隙間に入りこむ不意に貴方を思い出す
悲しみが恨みに変わる淡い恋孤独の人になりにけり
悲しみが貴方になって逢いに来る居留守を使う晩夏の日
悲しみは夏の終わりの恋心貴方の言動その仕草
悲しみは今も私につきまとう貴方を忘れられなくて

長い遊び

くろだたけし

渡れない川じゃないのにそれぞれの岸から石を投げつけあった
踏みつける大きな足があるなんて踏みつけられてはじめて知った
撃つ人がいれば撃たれる人もいて選ばれましたと通知が届く
ほんとうに社長を目指す人もいて資本主義っていつまで続く
待っているだけでも年は取るけれど怖がりだから隠れてしまう
探してもゴールはなくて落とし穴に落ちたところで終わりのゲーム
子どもらの長い遊びを見るように神さまは戦争を見るのか
審判に渡した金が足りなくて負けても金は返ってこない

五十周年の夏

桜さくら

恒例のロックバンドの夏イベにとどろくデビュー五十周年
二万人Kアリーナにあつまりてふたたびのない夏祭りする
「全身を鼓膜に」されるカフカ的ハイスペックな音を浴びつつ
いくつものシングル曲を歌いたりその半世紀束ねるように
遠い野の熱狂だった伝説のオールナイトも十万人も
新婚の友は夫を伴いてまんまとファンに引きこみており
願うのは終わりなき旅　解散も引退もなきうつつの声と
動線にあふれる帰路の人群とみなとみらいの夜景をわたる

旅先にて

澤田悠生

滑走路　車輪の跡は続きおり平熱のまま絶望のまま
台北の運転手たちの頼もしさスマホ両手のハンドル操作
濁流の寧夏夜市掻き分けて鱗を散らす我は鯉なり
揚げパンの油が粥に浮いていて水平線には月が浮いてた
霧雨の瑞芳駅の静けさよ線路の先は書かないでおく
言葉って難しいよね屋上の積乱雲が形を変える
士林のカムパネルラに物申す　愛する人は自分で守れ
僕たちはピクトグラムに導かれ知らない街の夜景を観てた

地上

西鎮

アーモンドの花の匂いだ、八月の坂道に立つ女のひとから
もう汗か涙かわからなくなったなにか拭って作業着の袖
空蝉の背中まっすぐ裂けていてあなたはあなたのまま、真夏日の
人ならば膝だと思う、東へと流れをかえて深くなる河
ミシシッピアカミミガメを爬虫類代表としてすりこまれたっけ
夏疾風　あなたを連れ出す口実は結局思いつかなかったな
人間が地上に引いた線だから越えられるって鳥たちはいう
スターマイン　友だち以上の帰路にする覚悟はいいか、俺はできてる

夏の海

寿司村マイク

ひとすじにサーファーは立ち海上を近づいてくる膝のまっすぐ
シュッとしてボードを抱いた沖からの使者は中村竜似のおじさん
あしくびを水に浸せば思わずに強く浚った砂の流れよ
あうらとの読みかた知らないころ読んだ林あまりの足裏の恋歌
伝説のBEACHの地図は渡されず今日の予報は36℃
缶ビール買ってこなくて取りあえずご覧よあれが医科大病院
ポケットの本を両手で見開けば水平線と平行になる
でかい声出せて面白かったかな　制服で濡れる高校生たち

夏の底

鈴木智花

智花でも鈴木さんでもなくなつて飲みに行きたしちよつと底まで
なに飲んでゐるの　となりに来たひとはバニラローズの香りをまとふ
昼も夜もないバーカウンターはいい　互ひに名前も知らないままで
店で会つた男との顛末を聞く心の中でサキユバスと呼ぶ
一人遊び続けるやうにサキユバスはチワワのことなど話して笑ふ
そしてふと粗末にしてゐる気がすると彼女は云つた自分のことを
よく来るの？いいえ時たま　ああさうださよならをしないままで別れた
また粗末にしてゐるだらうか夏の底の魔物のことを考えてゐる

S（UNAYAMA）F 八首選　表裏無限体

砂山ふうり

秋空よ澄めよわたしも最果ての見知らぬ人の最果てになる
墨を磨る紫式部の硯には超新星の光も混じり
屋上に海あるといふ階段の吹き抜けをゆく番（つがい）のことり
妹も吾もいつまでも子のままに銀の夕ぐれ金の夕ぐれ
遠くからミラーミラーと飼い主が陽の沈みゆく海に現る
聞こえない光の中の蝉しぐれ音なき蝉を母は見上げる
風にハグしながら我に近づきしカモメよそのままハグをしようか
花を挿すように紅茶を入れるひとの無言が沖の舟まで届く

戻り道

たえなかすず

初恋を消去法にて思い出す　美術部なりの絵なども　草々
その話、何回するのあの女（ひと）ときみのLINEの起承転結
ダウンタイムのまぶたに夕陽　生き方を間違えた気がします、母さん。
ほろほろと崩れるくちどけのように死後もきみから愛されたいな
射す、翳る、地球最後の日を歩く　まず野花からほろぶ道のり
同意書の余白の下のなぐり書き本日も明日も曇天なりき
ペンダント無くして気づく重さかな想い出なんてそんなもんでしょ
ストライクバッターアウト　審判の正しい夏の終え方だった

台風のセレナーデ

多香子

杏の実黄いろに熟れる夏の日にきみは翼を広げ始める
台風になる寸前の低気圧　あさっての旅行は行けるのかしら
台風が大雨連れて通るから、今年の町の夕涼み会中止
台風に夏の終わりを告げられてひまわり迷路の出口が見える
秋のげし荒らすが如く手折りては夕ぐれの野に風の音聞く
鈴掛は嵐の季節に負けないで腕を伸ばしてリンと鈴振る
ぬばたまの闇にガサッと冷蔵庫あれは氷の落ちる音です
口喧嘩、背を向け寝たるその後は台風一過の麗しき朝

ともだち

千原こはぎ

「とりあえず生」で始まる　これまでと何も変わらないデートみたいに
新しい眼鏡だね、それ　買ったことすら知らなくて当然だった
「最近はスイカジュースにはまってる」　わたしも、とかもう言わないけれど
ずいぶんと涼しくなった駅までの夜をゆっくりゆっくり歩く
発車まで見送ることももうなくて目を伏せてゆく別々のホーム
尾を引いてしまわないようふらふらと寄り道で買うコンビニスイーツ
真っ白に塗り潰されて何ひとつ残らなかったきみとの未来
熱帯夜みたいな日々を繰り返すことのないようともだちでいる

名にしおはば

ともえ夕夏

やはらかき　み　の付く名前に憧れてインターネットのHN
渾名すらなく丁寧にさん付けで呼ばるるときの透明な線
子供にはこんな名前をつけたいわふたりの吾子はどちらもをのこ
『美紀』といふ名の美しき少女には美しくても病のうはさ
一度だけこの名の由来を聞く期待した物語ではなかりけり
『ゆうちゃん』とかつてわたしを呼びしひとは二度結婚し離婚したらし
病院も郵便局も銀行もたまにわたしの名を間違へる
妻になり母になりたり名前などなくとも機能する有機体

ペリエの緑

中村成志

信号のすべてが赤を放つなか午後十一時蝉のひと鳴き
公園の朝の木陰に風があるベンチが乾くまで歌を読む
食いものの泥より生まれ来る不思議いっせいに穂が風へ抗う
思い出の品が手元にあるかぎりおもいでになってくれない、だから
水道の水束が打つ午後二時の汗に疲れたハンドタオルを
夏を覆う虚無へと並べカティサークの、ハイネケンの、ペリエの緑
崖いっぱいの葛葉がりゅうと裏返り白さを保つ三秒、五秒
早朝の熊ん蜂が揺するアベリアの白花垣を左へ曲がる

父を送る

夏野ネコ

ラジオよりデスペラードの流れをり瞼は父を夏へ閉じ込め
帰宅せし動かぬひとの白きかお撮りて見もせず削除もできず
抱き締めていいかわからず頬骨を指でなぞれば日々と日々、日々
保険より服だったんだあのひとの背広が次から次と出てくる
シャンとしたひとだったよね、叔母さんの言葉で着せた最期のスーツ
こんなにも話しかけたことはなかった返る言葉もないというのに
もう食えぬ人をば送るサラチキを齧るごめんよ腹が減るんだ
ああ寝てる寝てるラジオをつけたまま知らんぷりする目覚めないのを

チーズ・オン・不平等

袴田朱夏

経済のふるう国からやってきたミスタードーナツ、ミセスベーグル
カロリーはあれは単位だ　スマホならギガが足りないとか言うだろう？
エルメスのかばんの中のうまい棒見えていますよチョコレート味
むかしと違うあつさだからねベーグルにのったチーズの勝利宣言
チー鱈も割かせてくれるのにさらにさけるチーズが割かせてくれる
賢明なひとはアルミをはがさずに６Ｐチーズを４人で分ける
追いチーズ追いタバスコをかけて焼く冷凍ピザはやさしい地獄
平等という不平等　あなたならうまく奇数に切り分けられる？

なつのみず

薄荷。

ふるさとの川と同じあお色の靴下をはけば風はかろやか
ふるさとの川はよかりし思ひ出のひとつひとつに輝く水面
ゴールってことにしていた河川敷公園にいるハトは灰色
海まではあと十五キロ緑色の風が背中をゆっくりと押す
サンダルを左手で脱ぐ（目の前の海の白さに憧れている）
夕立は世界を白く切り取ったいじめられっ子の記憶のままで
貝がらは割とおしゃべり窓をうつ夕立ちにまで挨拶をする
この夜をころがり落ちる雨粒をすくってみせてよビッグ・ディッパー

大規模店舗怨歌

笛地静恵

当面の利益を求めガツガツと餌に群がる実力者ども
駅前にデカい面して出店の大規模テンポ金を集める
ひとつふたつ弱い店から消えてゆく捨てられるのさ腐ったミカン
閉店の顔のなじみの本屋さん二言三言ことばを交わし
駅前の商店街をメチャクチャに壊してついに廃墟にしたよ
ひとびとのつながりさえもすりつぶしカンプなきまでたたきつぶした
売れないとわかればすぐに諦めてスタコラサッサトンづらをこき
中国の巨大資本に潰される大規模店舗いつか来た道

これが愛

福山桃歌

これが愛　胸を張っても届かない手があることの虚しさは無限
やわらかい心でいたいのに指が勝手に綴るちくちくことば
迫りくるタイムリミット駆け出せない足にたくさん枷をぶら下げ
あの曲のアウトロだったオルゴールアレンジだったとしても分かるよ
感情をたやすく殺すスイッチがええ歳こいた大人だからある
涙なら代わりに流すから青く湿度の低い空になってよ
これが愛じゃないとしたらチケットもないしタオルも掲げてないし
だとしても祈るよきみのためだけにきみが笑顔で帰れるように

傘をもたずに

古井　朔

やっぱりね気がするだけで朝が来てなんとなく始まる同じ一日
また今日も天気予報は必ずハズレいつもどしゃぶり誰かの空は
いつのまに扇風機が首を振りわたし以外を冷やしはじめて
きみいない日々になれてきた頃に傘をもたずにひとりで歩く
ボクたちはそれぞれ正しさ言い訳に互いを許せず充たされぬまま
あの日みた花火の色はせつなくて西瓜に塩はなくても平気
果てしないクロールの先、立ちのぼる　忘れずにいつづけるのは罪ですか
雨上がり琥珀色のしずく零れ落つあなたはわたしの心星でした

リトルボーイ

まさけ

蟻の巣を無邪気に潰す少年もある意味それと同じに見えて
諌めつつ観てる未来の戦争の新作アニメ　それは楽しく
八月の夜中に密か降る雨はオッペンハイマーの涙と思う
蹂躙をされて倒れたデイジーにたらふく水をかける真夏日
「平和ってなあに」と問われ息を呑みミサイルが飛ぶニュースを消した
黙祷の真似をしている少年に少し教えた戦争のこと
また花を咲かせるように願いつつ今朝は二人で水を与えた
放たれた鳩が減ったと報じられ平和の意志を継ぐ難しさ

ドライフラ

御糸さち

相合傘したら一緒に濡れちゃうし傷つけ合うしかない帰り道
変数の値をひとつ間違えてすべてくずれて　ゆく　プログラ　m
別れても好きな人とかないないない引かれぬように切る後ろ髪
思い出のくだりはいいか鮮やかなドライフラワーなんてないじゃん
みとめるね猫になりたいわけじゃなくなんにもしたくないってことを
いつか見た夢の話をするなんて現実に対する居留守だよ
光差す方に日傘を傾ける　影ならきっと分け合えるから
アップルパイ、ホールで買って分け合ってうれしいことは何度でもしよ

キンギョソウの咲く庭に

深影コトハ

どんな蝶だったのでしょう蜘蛛の巣に呼び鈴のように揺れる片羽
草を刈る左手にまだ自分でも見慣れぬ銀の指輪がひかる
春に咲くキンギョソウなんて植えてみる初めての冬を迎える庭に
奥さんと呼ばれて少しくすぐったい日当たりのよい窓辺で暮らす
電話越しのあなたの嘘に気がついて夕焼けにあぶられてゆく家
ネクタイを解けばすぐにパクパクと金魚のようにアリバイを吐く
ねえこれで二度目ね　証拠を突き付けて始まるあなたのアナフィラキシー
かわいらしい奥さんになるねキンギョソウ枯れたあとまで抱き続けてね

レベル32

南の島

頼れとも責任持てとも言われつつ持つ持たないを決める年頃
いいねって思われたいけどほっといてほしい押さえるトレンドとごきげん
ソファー席研修生と連絡が取れんと笑う背広が二つ
積み上げたものが形になってきたぶっ壊してと歌ってた友
また一人優しい人がいなくなる四十の主任の独立祝う
大人しく大人の愚痴を言い合ってウチら大人になっちゃったよね
#MeToo と声あげる人黙る人みんなの中のひとりの話
大丈夫逃げても同じ広い世界みんなでつくった宇宙にひとり

可能性の花

水せ

なんだってなれるぼくらは空の子で飛ぶ鳥を追う夢をみている
あなたへの言葉にできぬ思いから生まれた花よ虹色に咲く
いつだって先ゆくひとだ伸ばす腕みじかくて、みじかくていとしい
背を追っているの永遠シンデレラ靴は砕いて駆けてゆくから
あこがれを胸に高く飛び上がるよまひるの月よどうか待ってて
ならびたつことを望んでいるわけじゃないの、わたしは尊敬を抱く
ぴんとする頭の天辺から足先まで凛と　きみになりたい
あざやかになるための白、可能性未だ蕾であるのは君も

ひかり

六浦筆の助

内側のかさぶた蒼くひかっては瞳吸い取る曜変茶碗
閃光をお告げとし受く花火の日　巡礼衣装の浴衣も闇に
夏の夜はくすぐったいね、縁日の裸電球ぼんやり差して
ノックするジリリ・ドンヨリ・ピカゴロをステンドグラスが迎えて、ドラマ
スクリーンに映る役者の広い闇ぐっと焼き付く電影でした
曇天の日に夕焼けを食べたくてひかりに透かす釜玉うどん
日光に負けてひかりを閉じてゆきうとうとしそう古いスマホが
「このままで突っ走ります」推敲の迷い断ち切るコピーのひかり

たまには会おうよ

六厭めれう

細長い空き地が延々つづくからそこが軌道であったと分かる
史上初、史上初って繰り返す暑さを語る語彙の少なさ
結局は褒めるんかいな居酒屋のお通しみたいな嫌味のあとで
朝・晩と朝・昼・晩の処方だと昼を忘れる才能がある
家でならブラックで飲むコーヒーに保険のようにミルクをもらう
それぞれのスティックシュガーが秘めている水平線が一致している
謹呈箋しおりのように挟まれてしおりとしての役目を果たす
エレベーター錘が去ってゆくときに近づいてくるゴンドラがある

夏の終はりに

村田一広

客もなき電車一両音もなくローカル線の霧深くより
夏限定のスイカスイーツ海岸で夏限定の友といただく
バスタオルから湯気が出てゐる夕立のシャワー全身に浴びせられ
撫でてゐたのは水面で庭の池の気持ちやうやく落ち着いたころ
夕立の名残りが地面叩いてる太陽が待ち切れず顔出す
一口で飲むよりハンカチを染めて手元に置いておく赤ワイン
誤解とくやうに優しくほぐしゆくコンビニの冷やし中華の固まり
路地裏に逃げ込めるうちはまだいい猫がなぐさめてくれたりもする

ニガクテアマイ

森内詩紋

狼狽える顔は見られたくなくて眼鏡をなおす振りして笑う
いや、だってわざわざ口に出せないし?ワンピースむっちゃ似合いますね、は
なんてことないような話してるだけなのにじんわり肩がほぐれて
丁寧に作業するのだ気を抜けばあなたはきっとすぐにわかるし
あとコーヒー一杯分はこのままで　そしたらやはり帰らなくちゃね
安心は儚いものだ　たとえれば無添加シフォンケーキのように
未来への約束が決してないとしてそれと恋とは別問題で
抱えこむほろ苦さ確認すべくレタスの外葉むしりとり食む

フルーツフルーツ

ヨシダジャック

夏の宵、エンデの『モモ』を読むとききみの美しい舌
降参は受け入れられず鬼灯の五角形のあやし、あやし
疲れ果て起こせぬバイク蹴ってみようかいっそ桃を食べてみようか
Hurry, hurry イチゴが3個残された畑を知っているのよわたし
夏は朝から。一日じゅう本を読んで桃を食べて暮らすの
たぶんこれから突き落とされる湖水には柘榴の花が浮かんでいます
バナナマンのぴちぴちの服はるけくて街は名前を知らぬ祭日
焼きあがる魔女のケーキ黒い森でいいサクランボだけを集めて

壺中天ゴルフ

れいあむ

夏あらし土砂降りの雨のそのあとに秋の来ないを扇風機と待つ
ひたすらに踏みしめる砂の響きして白磁の壺でゴルフする祖父
南瓜色したトロッコで登る坂　〝またね〟と手をふる烏滸がましさよ
垂るる氷と飲む珈琲のただ滲む玉屑などは言の葉すら死
振り返り振りかえりして背ばかり向日葵の子の「鬼さん、こちら!」
エアコンに餓えてはふと水さぐる目の下にクマでも微笑うぼく
むしむしとのたうつ影に我ひとり夕星を射る時がちぎれる
フロストの蛙のような夜の露なんだかチルい君ん家泊めてよ

テーマ詠「夜」

星河より雨そぼ降りて神聖の森にいだかれ夜鷹は眠る
◆碧乃そう

月が知る限りの「きみ」を照らすため地球くまなく夜回りをする
◆青野佑季

噛み砕くグラスの氷 真夜中のファミレスでしか摂れない養分
◆麻数

夜という空間にいて日陰とは時間なのかと眠たい思考
◆麻倉ゆえ

しづかなる蚊取線香ひたひたと渦のかたちに夜を燃やして
◆有村桔梗

まもなく闇、闇ですお出口左側３番のりばに到着します
◆井倉りつ

夜に降る雨を有り難がる我は川中島の小説を読む
◆石川順一

三秒で眠りに落ちた君の横夏の星座の図鑑を開く
◆宇井モナミ

蜃気楼　夜の噴水に残されしカラスアゲハの標本渇く
◆宇祖田都子

眠れない理由を夏のせいにして何も見てないふりをしている
◆泳二

みちみちに満ち溢れてる後悔の重みをもって漂う深夜
◆ゴ

光る湍とたゆたふ河を夜空へと見上げる。あれはこほしき常世
◆歌島孟

遠すぎる空は夜空とおんなじで諦めるって容易いことだ
◆涸れ井戸

街灯も消える時間を過ぎていて深夜を統べる王になれそう
◆河岸景都

真っ黒な遮光ネットを取り去って明るくなった暴風雨の夜
◆砧

やってくる夜が少しずつ早くなる九月は人を忘れる時間
◆君村類

手のこうに「オレンジ」とペンで書いた子が眠る電車が輪を描く夜
◆久野和声

一人きり貴方のいない悲しみと子猫の声で夜は明けてく
◆久保田毒虫

再起動するまでそっとしておくね毛布をかける半夜のソファー
◆くうたか湖春

眠らない梅田の街で星たちは見えないように僕らを照らす
◆澤田悠生

背徳感ちょっとあるかも寝転んで夜中に食べる最中のアイス
◆じぇうーと

あゝこれはきつとあなたの来る夜を待つて開かないハチミツの蓋
◆西鎮

血に濡れた少女の心包み込む夜という名の神秘のヴェール
◆白石夜花

こんなにも豊かだったか祖母と聴く虫たち主催演奏会は
◆せいや

夜もすがらおにぎりせんべい噛むだろう五十年後も元気なふたり
◆たえなかすず

生ぬるい海底みたいな夜をゆくあなたは泳ぐことまで得意
◆千原こはぎ

君のことあきらめようと決めた夏見上げる星にぼやいたりして
◆ 辻堂　瞬

爪をたて甘ゆるふりをして今夜あなたのうろこ一枚うばふ
◆ ともえ夕夏

夏を殴り夏になぐられ向日葵ががっくり垂れる九月の闇に
◆ 中村成志

おれはまだ呑み足りないぞ祝宴の帰路をゆらゆらついてくる月
◆ 夏生薫

夜は秋きみの手にもう汗はなくやがていつかの花火の熱さ
◆ 夏野ネコ

三歳を夜のくぼみに眠らせてそろりとナイトスクープを見る
◆ 袴田朱夏

真夜中の雷みたいな味がして最初のビールは衝撃でした
◆ 薄荷。

《夕鶴》の台詞こぼれる校庭の一番星を見上げて帰る
◆ 笛地静恵

夏と秋、狭間の夜空に流星雨／これがきみとの適切な距離
◆ 古井　朔

貴方へのこころがここから飛んでって貴方を照らす優しい月に
◆ 真岡まな

夜明けには終わる運命の愛だった　月下美人の微かな香り
◆ まさけ

台風の前夜に買った鮭メンチこんなすがたになってしまって
◆ 御糸さち

秋の夜の席を譲って立つ人が黙読をする離乳食レシピ
◆ 深影コトハ

辞めてきた仕事の思い出今夜会うあいつの返事に賭けてみようか
◆ 南の島

不安気にぴとり猫背にくっついておやすみと言うぼくの飼い主
◆ 衣未（みみ）

眠れない夜にやさしい歌が聞こえてくるんだよまぼろしのひと
◆ 水せ

あの夜は踊っていたと言えばいい　シーツのドレスとジャケットを着て
◆ 宮岡りょう

妹もお前も二度と帰らない鴉の夜の濡れている石
◆ 虫武一俊

闇の中時をゆっくりなめしゆく田舎の宿の藺草の匂い
◆ 六浦筆の助

シーリングライトがつくる闇色が灯されてのち夜は訪う
◆ 六厩めれう

真つ暗な姿で新居現れて灯せば調度見せてくれたり
◆ 村田一広

白光をうけとめきれず目を閉じる　いいえ月蝕、これは私の
◆ 森内詩紋

こいびとを帰した夜はしろい波だけがわたしへ訪れている
◆ 杜崎アオ

パトラッシュおらぬ部屋にて疲れたるとも言へずし夜を閉ぢけり
◆ 箭田儀一

初更、二更、三更、四更、月光がみどりに染める夜の外縁
◆ ヨシダジャック

〝パンケーキアガヴェシロップバターのせ〟しじまに星の涙が墜ちる
◆ れいあむ

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

ポップコーンしゃもしゃも崩しながら観たつまらない映画できみが泣いてた　君村類

連作「ばけもの」には、助詞ひとつ異なるだけのほとんど同じ歌がふたつ組まれている。この歌は六首目で、一首目では結句が「きみは泣いてた」である。〈は〉も〈が〉も主格を表す助詞という点では同じだが、その使い分けによって、連作の中で「きみ」に対する主体のフォーカスがクリアになっていくのが伝わる。主体の抱く社会への関心や、開かれていく視界を感じさせ、とても巧みな一首（あるいは二首）と思う。

一首評　北谷雪

あの雲の高さから落ちたにしてはやさしい雨だ　さよなら、ディラン　袴田朱夏

ボブ・ディランのことか。彼で「雨」といえば名曲『激しい雨に降られて』を思い出す。「さよなら」とは、ノーベル賞を受賞するほどの存在になった彼への惜別だろうか。「そんな高みから降らせてるのに、あの頃の激しさはもう無いじゃないですか」という。いや、歌の肌触りから感じるのはそんな表層的な皮肉ではなく、もっと内面から発される切実な何かだ。句跨がり、一字空けと読点が、心情の揺れと呼吸を伝えている。

一首評　中村成志

そんなのが許されるならなんだってできる気がした　イェーイ　オニスズメ　深山睦美

連作の一首目。なんたって勢いがある。すぐに次の歌を読みたくなる。なんたってイェーイ　オニスズメだから。連作を通じて悲壮感が無い。心地よいドライである。湿っぽい抒情歌なんて用はない。用はない。から元気でもなんでも。嘘のエネルギーでもなんでも。歌のなかに放り込めばほら元気がでる。食事のときも。寝るときも。元気が。なんだってできる気がする。途中駅でも。生きるべきでも。気がする。イェーイ　オニスズメだから。

一首評　ヨシダジャック

きみはいい子になった褒美としてきみになったのか　おとうとの椅子　ヨシダジャック

様々な読みが許容される歌と読んだ。破調だが、何度も声に出して読みたくなる韻律の良さには、トータル31音であること、そして結句の収まりの良さが効いているのだと思う。〈きみ〉は、結句の〈おとうと〉にも〈椅子〉にも読める。直接的にはそれに言及することなく、今は喪われてしまった幼少期もしくは少年期の弟の面影、もしかしたら弟の生命そのものに対し、椅子を前に思いを馳せている景が浮かんだ。

一首評　西鎮

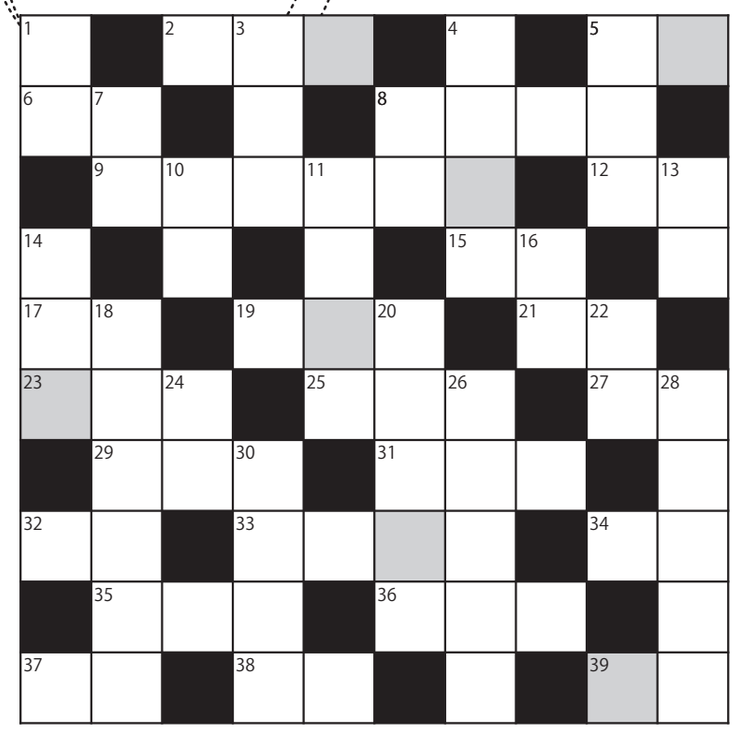
空欄を埋めよと命じる問四を入道雲でいっぱいにする　宇井モナミ

テーマ詠「雲」からの一首。問題の答えが思い付かず真っ白である事と、思考が纏まらないという事を、モクモクと白が広がり続ける雲の特性を使ってユーモラスに表現している。また空欄を窓に見立てて無限の空に現実逃避出来るのも面白い。結局、現実では空欄が白い事には変わりはないが、上の句の問題文から受けた威圧感と、答えが分からない不安感に対する精一杯の抵抗が感じられる。

一首評　澤田悠生

気軽に ほっとひといき クロスワード

色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね　こたえ



ヨコのかぎ

2　人に勝とうとする気性
5　物のとがって突き出した部分
6　蜂○○のうごきの鈍ささへ冬のよろこびとして眺めてをりぬ　／笹井宏之
8　買うのではなく借りること
9　世界一の記録を集めた本
12　実際以上に美しく表現すること
15　黒くてとげとげの海の生き物
17　作業工具、防具、ヘアアイロンの一種
19　畳を敷いた部屋
21　パイプ、チューブ
23　建築業界では詰め物のこと。小豆などを甘く煮詰めて練ったもの。
25　前もって必要なものをそろえ、整えておくこと
27　レジスターの略
29　寝るときに着る衣服
31　明治屋に初めて二人で行きし日の苺の○○○の一瓶終わる　／俵万智
32　○○も実力のうち
33　価値のある情報。またそれを聞くこと。
34　さらさらさらさらさらさらさらさらさらさら○○が粉ミルクになってゆく　／穂村弘
35　「守る、防ぐ、警備」を表す英語
36　陸地を掘って船が通れるようにした水路
37　今日の次の日
38　ニホン○○、シマ○○、ふさふさした尾の小動物
39　人体の全体をコントロールしている重要な臓器

タテのかぎ

1　わが胸にぶつかりざまにJe（ジュ）とないた○○はだれかのたましいかしら　／杉崎恒夫
3　将棋に似た西洋のゲーム
4　空気などの気体が希薄な空間
5　牛・豚のばら肉
7　三人子（みたりこ）を○○から○○へ湯に入れて白鳥の倚（よ）るごとく疲るる　／岡井隆
8　順に長く並んだもの。並び。
10　改札まで繋がっていた手の○○を夜空で冷ますように振り合う　／ toron*
11　文字で書き記したもの。書類。
13　腕のつけ根の上部
14　不器用に季節は過ぎて朝焼けにはじまるきみの○○○週間　／山田航
16　○○を切らせて骨を断つ
18　自然に地中から沸き出るガス
20　普段。普通。いつも通り。
22　○○が見てもわれをなつかしくなるごとき長き手紙を書きたき夕　／石川啄木
24　回転させて遊ぶ伝統的な玩具
26　穴を開けない耳飾り
28　賞を受けること
30　黄色がかった緑色

短歌リレーコラム

望遠鏡 22

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　献身

書き手　斎藤君

行方不明者に関する情報提供のお願い
名前　高村咲恵
年齢　４８歳（昭和５１年９月２０日生）
身長　１５８ｃｍ
体型　中肉（５４ｋｇ前後）
服装　水色チェック柄ブラウス　黒のジーンズ
髪型　ショートカット　白髪
特徴　左目が白濁している　左手の薬指、小指が動かない　左足を引き摺って歩く

心当たりの方は、下記警察署又は最寄りの警察署、交番までご連絡ください。
埼玉県○○警察署生活安全課
電話０４２ー○○○ー××××

秋の声ひたひたと来て吾子のまた三面鏡の奥に泣きおり

この歌は母が失踪する前に短歌会に提出していた歌のようです。だから二年前の作品ですね。他にも何句か、あれ？短歌は首でしたっけ？まあいいや、何個かあったんですけど、この歌に固執する人が結構いて。まぁ主に則宝会の人達ですけどね。何を表現しているのか僕にはさっぱりなんですけど、見る人が見ると何かわかるらしくて。あぁ、お姉さんもそうなんですか。やっぱり何かあるんだこの歌には。でもお姉さんはあれですよね、母のいた則宝会の人じゃないですよね。はぁ、そうですか、記者さんですか。てっきり警察の人かと思いました。

ええ、そうです。母が失踪した日は、まさにその短歌会がある日でした。その頃僕はずっと体調が悪くて学校にも行けず、自分の部屋で横になってばっかりだったんですけど、昼頃に母が隣の部屋に入っていく足音を聴いたんです。はい、あれは母だったと思います。父は五年前に他界しましたし、祖父は畑に行っている時間でしたから。確か午後一時半頃だったと思います。隣の部屋は物置になっていて、短歌会が二時とかだったから、急がないと間に合わないよって注意しに行こうと思ったんです。その直前に昼ご飯を運んできてくれた時にはノーメイクだったので。重い体をなんとか起こして隣の部屋の引き戸を開けると、そこにもう母はいなかった。それっきりです。それから何の音沙汰もなし。近所の人にも知り合いにも訊いてみましたけど、何の手がかりもありません。警察にも行ってみましたけど、結果はお姉さんもご存じの通りです。

母は左足が不自由でしたから、家出しようにも短時間でそんなに遠くに行けないはずなんですよ。家出する理由もないし。母がいなくなって３０分くらいで僕もなんかおかしいな、と思って畑に祖父を呼びに行って一緒に車で探したんですけど、どこにもいませんでした。じゃあ誘拐かっていうと、さっきまで家の中にいたんだからそれもなんか不自然ですよね。身代金の要求もなかったし。理解できないことばかりです。

則宝会ですか。あぁ、あれはなんていうか、宗教？そこまではいかないのかな、まぁそんな感じのやつです。母は群馬の山間の出身なんですけど、そこに根付いている組合内の結束を図るための組織で、色んなイベント？とか奉仕作業とかをしてたみたいですね。特に清掃活動には力を入れてたみたいです。公園や田圃のゴミ拾いとか、どぶさらいとか。中でも公共物で姿が映るものは特に気を遣って磨いていたみたいです。公園のトイレの鏡とか、公民館のガラスとか、まぁそういうやつなんでしょうけど。なぜか幼い頃から鏡は綺麗にしなさいって母にも口うるさく言われてましたね。毎年お盆は母の実家に泊まりに行ってたんですけど、その時には必ず則宝会の人達と清掃をさせられてました。教義？いやぁさすがにそれはわからないですね。

ちょっとしか関わってないんで。あ、でもなんて言うか、等価交換の原則っていうのかな。一度則宝会のおじさんに姿の映るものを綺麗にする理由を尋ねたんですよ。そしたらその人は「苦しんだのと同じだけ幸せになるため」って言ってました。答えになってませんよね。だからもうそれ以上訊きませんでしたけど、そんな感じの教義なんじゃないのかなぁ。

え？鏡ですか？まぁ、はい、ありましたよ。物置の一番奥に。あ、奥って言っても北の隅です。物置は家具とか服とかで溢れかえってるんで、ちょっとした迷路みたいになってるんですけど、その一番奥に三面鏡が置いてあります。母がこの家に嫁いでくる時に一緒に持ってきたやつみたいです。おかしなこと？さぁ……三面鏡が開いてたことぐらいですかねぇ。普段母は洗面所で化粧するんですけど、年に何回かは思い出したようにその三面鏡の前で化粧するんですよ。だからその日はそこで化粧しようとしてたのかなぁ。あ、でもあれはおかしかったかもしれません。昼ご飯を運んで来てくれた時、なんかじっと僕の顔を見つめてくるんですよ。何？って訊いたら「そろそろ負債、返さなきゃねぇ」って言ったんです。意味わかんないですよね。

あぁ、おかしいと言えばですね、母が失踪してからいくつか変なことが起こったんです。まず、僕の体調が良くなったこと。僕ね、再生不良性貧血っていって、血液の難病持ってたんですよ。発症したのは三年前です。骨髄のドナーがいないとダメってくらい重かったんですけど、なかなか見つからなくて。週に何回も点滴とか輸血しに病院行ってたんですけど、母が失踪してからすっかり体調が良くなっちゃったんです。勿論手術も何もしていません。不思議ですよね。あとは家中の母の写真が全部失くなりました。スマホの画像も全てです。後ろ姿のはあるけど、顔が写っているものは全部ダメ。きっちり母の顔が写っているものだけ失くなってるんです。何故なのかはわかりません。何かオバケみたいなやつが母の痕跡を消そうとしているような気がして少し怖いんです。

はい？母の障害についてですか？はい、あれは生まれつきではありません。左足はいつからか教えてくれませんでしたけど、生来のものではないらしいです。左目と左手に関してはですね、何て言うかなぁ……。実は僕一回死にかけてるんです。難病じゃなくて事故で。五年前、父の運転する車で事故にあって、二日くらい意識なかったんですよ。で、僕の意識が戻ったら母の体はそうなってました。それまでは左足以外健康そのものだったのに。髪も黒かったのに全部白髪になってました。何の病気かは教えてくれませんでしたけど、不幸って重なるんですね。あ、あとその事故で父も死にました。はい、父は即死だったみたいです。

え？物置と隣の倉をですか？はい、かまいませんけど。倉を出るときは鍵を締めてください。はい。鍵は……あぁ、あった、これです。

「高村咲恵氏の失踪に係る報告書」

令和６年８月３０日午前、高村咲恵氏の長男、健一氏（満１４歳）への聞き取り調査を実施。本事案は、則宝会の鏡信仰に深い関わりがあると思われる。（中略）

同敷地内の倉の長持の中にたとう紙に包まれた写真を発見する。一人の女性が暗い部屋（恐らく写真の保管されていた倉かと思われる）にて臍の緒のついた乳幼児を頭上に高く掲げているものである。女性の周りには１２本の蝋燭が灯され、女性は開いた三面鏡の前に全裸で正座している。女性の顔は黒髪で隠れているものの、咲恵氏と推測できる。乳幼児は啼泣しておらず、顔は青ざめている。（写１参照）（中略）

以上から、健一氏は出産直後には死亡していたが、何らかの方法を用いて蘇生されたものと推測できる。（中略）

自宅物置内の三面鏡については、下部の引き出しに古い護符が一枚入っていたものの（神社名は劣化により判別不能）、特筆すべき異常は発見できなかった。（中略）

以上から、本事案を継続調査対象とすると共に、則宝会を要監視団体に格上げする事を提言する。

第二公安捜査第八係　八島祥子

リレーエッセイ 22

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　折れる
書き手　久永草太

ある日、町を歩いていたら僕が死んでいたとして、それをあなたが見つけたとして、かつあなたと僕とはそんなに悪い仲じゃないとしよう。しかも、なぜか死体は身ぐるみはがされてすっぽんぽんだったとしよう。身分を証明しうるものを身に着けていない死体を前に、きっとあなたは、その死体が僕の物でないことを祈りながらも、本当に僕であるかどうか確かめたくなるはずだ。そんな日に備えて、とっておきの僕の死体の見分け方を伝授しよう。

まず、解剖学の教科書を持ってきて、鎖骨の位置を確認する。鎖骨は両肩の前方に位置し、肩甲骨と胸骨に橋を架けるように関節をなしている。人間以外の多くの動物では、前肢を前後方向にしか動かさないために、あまり必要のない鎖骨は退化してしまっているので、獣医学ではなく医学の解剖テキストを参考にした方がいい。鎖骨への理解が深まったところで、目の前の死体の右の鎖骨をスーッとなぞってみて欲しい。鎖骨の中ほどで、ぽこっとした隆起が認められたなら、ほぼ間違いなく、高校一年生のときソフトボール中にヘッドスライディングをして右鎖骨を骨折した僕の死体である。なまんだぶ、なまんだぶ。

久永草太二十六歳、骨折歴五回（ヒビ含む）。これが世間的に多いのか少ないのかはわからないけれど、何回折っても痛いのが骨である。あるときは鉄棒を飛び越えようとして左腕を、あるときは畳の上で立ち幅跳びをして足の薬指を。だいたい僕の骨折というのは全く必要のないふざけた動作の末に発生していて恥ずかしい。

さて「骨折り損のくたびれ儲け」という言葉があるが、僕はこの慣用句を、我が尊い五回の骨折のひとつひとつに敬意をもって、めったなことでは使わない。あれほどの痛みが「くたびれ儲け」ごときで処理されては採算が合うまい。この言葉を作ったやつは、よほど骨折し慣れた百戦錬磨の猛者か、そうでなければ骨折未経験にちがいない。

という心の動きが、いいことなのか、過剰反応なのか、僕には判断ができない。イベントのアナウンス時に使って注意された「手短に」という言葉。東日本大震災以降、公共の電波で聞く機会の減ったサザンオールスターズのTSUNAMI。言葉に罪はないから、こうして使う機会を減らされては、言葉がかわいそうだとおもう自分がいる。でも、手が短い人に、津波に遭った人に、痛みがあって、痛みへの敬意があって、判断がある。この文章だって、町で死んだ僕を見たあなたの心を痛ませるかもしれない。こうして書くのが恐ろしくなって、僕の筆はいつか折れるのだ。

それが死と知らずにはしゃいでいたっけね僕ら倒れた椰子をかこんで

久永草太

ご感想はこちらまで！ Twitter(現X) ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter（現 X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告 第23号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄「昼」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

第23号 〆切 '24 10/31(木) 24時
● 8首の連作 自由詠　● テーマ詠「昼」1首

第24号 〆切 '24 12/31(火) 24時
● 8首の連作 自由詠　● テーマ詠「朝」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

今号のうたそら 第22号

参加歌人様 …… 63名
連作欄 …… 43名
テーマ詠欄 …… 52名
一首評 …… 5名

コラム　斎藤君 さん
エッセイ　久永草太 さん

ご寄稿いただきありがとうございました！

illustration: kohagi chihara

編集後記

地震や台風など、心配事の多い今日このごろですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。わたしは防災バッグを作り直したり、部屋の配置換えをしたり、少しだけ防災への備えに気を配ったりしていました。新学期も始まり、少しづつ夏も終わりに向かっていくようです。誰にとっても平穏で楽しい毎日でありますように。

今号もたくさんの作品をお寄せいただきました。クロスワードもご用意しています。短歌作品とあわせて楽しんでいただければ幸いです。

次号は11月発行、テーマ詠のお題は「昼」です。深まる秋にすてきな作品をお待ちしております。

編集鳥　千原こはぎ

うたそら　第２２号
発行：2024.09.01
編集・制作：千原こはぎ
@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/